
ラストライフ・オンライン

蜜柑

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ラストライフ・オンライン

【Zコード】

Z2332BA

【作者名】

蜜柑

【あらすじ】

一人のゲームプログラマーの妄執から始まったフルダイブ式VR MMO ラストライフ・オンライン 通称「L」。

VRMMOとして最高のクオリティと言われたそのゲームが、遂に正式サービスを開始した。

だが、「L」は誰一人としてダイブアウトを許さない、この世界での死を現実での死と同義とするデスゲームになった。

ダイブアウトするための唯一の方法はゲームクリア。

現実への帰還へ3万人の人々の冒険が始まる。

所以

最初に言つておこう。

この「デスゲーム」は一人のゲームプログラマーの妄執から始まった。

井形尋仁いがたひるひとは所謂「天才」であった。

ゲームプログラムだけでなく、シナリオもシステムも何をさせても一流。

ゲームの範囲にとどまらず、彼のデザインセンスは現実でも最高と評価された。

そんな彼を誰もが憧れ、嫉妬した。

そして、孤高の人としてもてはやされた。

だが、そんな彼をALS 筋萎縮性側索硬化症が襲つた。

ALSは全身の筋肉が萎縮し、その力を低下させていく病気であり、最終的には呼吸筋に及び、人工呼吸器を使用しての延命が計られる、現在の医学をもつてしても治療が困難な病気である。

脳の活動に影響はないとされているが、体の表現する力が失われてしまい、今までのような生活が少しづつできなくなり、表現の全てを失うことに井形は恐怖した。

そして、診断を受けて数ヶ月の間、全ての活動を休業する。

数ヶ月たつた後、彼が最期にと始めた仕事はフルダイブ式VRMMOの製作だった。

製作当初から公開されたそのゲームの名前はラストライフ・オンライン 通称「L」。

彼はひたすらにゲームの製作を続けた。睡眠や休息をとることは一度としてなかつた。

彼が テストの期間中にインタビューに対して答えた時に言つて

いた。

「いらないものは全てが終わってからでいい。これが私の最期なのだから。」

装備や世界のデザインからストーリーなど全てを一人で設計しテストさえも一人で行つた。、

彼の全てをこめた最期の作品は、今までゲームに触れたこともない人達さえも巻き込み、年齢や性別を問わず、多くの人がその世界に触れたいと願つた。

その結果、テストの応募者は1万人の募集に対し3000万人を超え、参加権が非合法に高くで販売されたと言われている。

彼の財産と彼の才能、その全てを込めたそのゲームの完成度は圧倒的で、テストにおいてバグが一度も確認されることなく、CMとしての効果しかなかつた。

それから数ヶ月、ついに製品版の販売が行われることとなつた。多くの購入希望者がいたが、井形はインターネットでの抽選販売とし、初回販売を3万個に限つた。

当選者は幸運だったのだろうか、不幸だったのだろうか。
それは、彼らそれぞれにきかなければわからない。

ダイブイン画面

――。

サーバーにダイバー登録が完了しました。

種族、キャラクター・メイキングに関しては今後変更できません。
キャラクター・メイキングに入ります。

――。

キャラクター及び種族の登録が終わりました。
クラスセレクトに入ります。

――。

「クラス」 「に決まりました。
チュートリアルを行いますか？

――。

? はい。 いいえ。

それでは、チュートリアルを開始します。

――。

それでは、チュートリアルを始めるとして。

この世界の活動は基本的に現実の活動と変わらない。歩こうと思えば歩ける。物をつかもうとすれば掴む。時間がたてば空腹感を覚えるし、疲労感や眠気も発生する。

現実と変わらないここはもう一つの幻実げんじつといえる。ただし、ステータスが存在し、そのステータスが許す動きしかできない。

現実で陸上の選手であろうと、ここではAGIが低ければ速く走れない。

戦闘に関してもステータスの範囲内で避けるも防ぐも自分でやるしかない。

ただし、それをアシストしてくれるのがスキルだ。

バックステップのスキルを念じれば、後方に普段ではできないよ

うな疾風のようなステップができる。一跳ジャンプでは空中にいてもさりに空気を蹴り上がることができる。

攻撃系スキルはステータスに合わせて動きをアシストしてくれる。アビリティーはスキルの成長にあわせて習得する。

槍術スキルを上昇させることで習得するアビリティー「ナイスマスト」を発動させると一段突きが行われる。

スキルやアビリティー、クラスの成長はプレイヤーのプレイスタイルに合わせて変わっていくので心配ない。

決めるべきはステータスの配分とクラスチェンジ時の同意か拒否のみだ。

さて、空腹感などの対処法についても説明をしよう。

しかし、これもまた現実と一緒にだ。

食べればいいし眠ればいい。

調理も出来るし、栽培や釣りも可能だ。

武器の製作もできる。

が、これについては長くなってしまつので興味があれば、ギルドに行つてみると良い。

困つたら近くのダイバーに聞いてみるのもいいがギルドに行くといつのも良い方法だ。

それでは、ダイブインするとしよう。

この世界が貴方にとつて素晴らしいものになることを願つ。

――。

サービス開始当日

今日、8月10日は「」のサービス開始日だ……。

そんな日だつていうのに、学校に呼び出されている。

なぜなら、俺、月影彼^{つきかげかなた}方は高校3年生で進路相談を受けなければならぬからだ。

版からのダイバーとしての知識を活かして、スタートダッシュを決めて、「」最強を目指そうと思つてたのに……。

でも、両親が死んでからずっと2人で生きてきた姉さん、月影氷花^{つきかげひよ}は、大学の夏休みを活かして準備万端で、昨日なんか4時間も「」のレクチャーをさせられた。いつも支えられてばかりだった姉さんをサポートできて嬉しかったのは秘密だけど。

そんなこんなで家を出なればいけない時間になつた。

「姉さん行つてくるよ。」

と言つと、最近ショートカットお試し中の姉さんは玄関まで来て「いつてらっしゃーい。遅くならないように帰つてくれるのよー。」と送つてくれる。

いつもの姉さんを知つてゐる人には信じられないある意味危険な格好だが、それがいつもと変わらない日常だつた。

近くの駅に向けて歩きながらサボりたい気持ちが膨らんでくる。でも、今日ダイブインできるだけでも奇跡なのだ。

当選発表の日に、俺は当然の様に「」初回版のハズレの通知をいただいた。

わざわざ印つてもらい、画数的に良いと言われた祖父の住所で応募したつていうにあの占い師めつ・・・。

そんなわけで、版で仲良くなつたダイバーにチャットでそれを伝

えた。

確かにこんな感じだった。

――。

「ははー。やつぱり落ちちゃったよ。」

「えつー? なんで! ?」

「なんであつて応募数やばかつたし、仕方ないんじやないかな。」

「そつそつだね・・・。」

――。

沈黙が痛い。そいつは当然の様に当選したらしい。

「あのせ。一個余つてるんだけど使う?」

!?

「余つたってどういづー? いるよー? いるいるー欲しいですー。」主人様! でもいいのか?」

「(?)主人様つて・・・これが? これが欲しいのか? ・・・言わせんなー恥ずかしい。すぐ送るから、住所教えて。」

そして、サービス開始前日、つまり昨日届いた。お礼はゲーム内でしつかりさせて貰おう。

そういうことなので、学校にはしつかり行こう。

――。

職員室の前の廊下にはまばらに学生がいた。

進路相談も佳境らしい。

俺の前のやつの相談も白熱してる様だ。

そして、そいつが出てきたのは予定の20分後だった。

廊下に出てくるなりこつちに気づいたちょっとだけ人より背の高いポニテールが似合つてゐるそいつ、幼馴染の環状葵かんじょうあおいが声をかけてきた。

「かなたあー。進路相談終わつたらうづち来てよね」

「ばかいうなよ。今日は敬愛する井形尋仁いがたひろひとの最終作をやるつて決めてるんだ。」

「絶対来なさい！5分で済むから。」

「はい。行かせていただきます。」

俺とコイツはこういう関係だ。昔からこうなのだから仕方ない。面倒見のいい優しい奴だけど口が多少悪い。

「如月君。入りなさい。」

「じゃあ家で待つてるからね。」

「はいはい。」

- - -

デスゲームの始まり

進路相談は予定より長引いた。

俺は姉さんを支えたい。

両親が死んでから3年間、姉さんは高校生でありながら一人で俺を育てくれた。

祖父から同居の提案もあつたが、両親の思い出が残るうちに2人でいた。

隣の環状家のひとも良くしてくれたおかげで2人で幸せだった。

だけど、逆に言えば将来が具体的に見えない俺には相談するだけのものが無かつた。

結局のところ、進路相談は少しの進展も無く終わった。

今のところ、料理ができて家事もできる自分に不十分を感じていない。

「さて、帰るしますかー。」

――。

帰る途中にいつも交番の前を通る。家から一番近い駅の横にあるから仕方ないけど、悪いことしてなくとも緊張してしまつ。横目でチラッと中を見てしまつのは癖になつていて。

しかし、いつもの平穀無事な様子では無かつた。

いつも茶をすすりながら和んでいるそろそろ定年かと思つてゐるおじいさんな警察官が爆発物を見るかのような目で俺も知つてゐる箱を睨みつけていた。

「初回版の箱だ・・・。

嫌な予感がした。

確かに希少価値で数百万ぐらい余裕で行くんじゃないかというゲームだから扱いに困るだろうけど・・・。

そんな悪い予感は数分後に真実を教えてくれた。

町が騒がしい。

特に、町の中で最も大きいモニターを掲げたデパートの前。人だかりができている。

普段は流れているニュースに見向きもしてもらえないそれは今日は違つた。

モニター内のニュースキャスターも見るからに慌てている。

「緊急放送です。ラストライフ・オンラインというゲームにおいてダイブアウトできない、ゲームをやめられない状態になっています。電源を落とすなど強制的にダイブアウトさせた場合、ダイバーの脳に障害が発生し、脳死する事があります。絶対にダイブアウトせず警察に連絡をお願いします。」

ニュースキャスターの前にさらに新しい紙が渡された。

「新しい情報が入りました。このゲームの製作を行つた井形尋仁^{いがたひろひと}・

・容疑者からの映像が届いている様です。」

――。

「皆さんこんにちは。井形尋仁です。3万人のダイバーを私が預かりました。しかし、彼らには飽きる事のない生活を提供しますよ。ただし、ダイブアウトする事は誰一人として認められません。ダイブアウトするためにはゲームをクリアするしかない。といつてもゲーム内で死亡すると現実でヘッドギアから死のデータが送られるので気をつけていただきたいのですね。死んだと脳が認識すれば人はほんとに死ねるのですよ。ヘッドギアやゲーム機に衝撃を加えるのもオススメしません。ちなみに、私を捕まえて止める事も出来ま

せん。なぜなら私は誰の手も届かない世界に逃げるからです。」

映像はそこまでだつた。

尊敬するその人の姿とその声を聞いてやつと俺は理解した。
「デスゲームが始まったのだと。

「姉さんを止めないと…」

―――。

「姉さん！」

姉さんの部屋の扉を蹴破る勢いで開けて入ると、ベッドの上に静かに眠っている姉さんがいた。

ヘッドギアで顔が見えない。

姉さんは既に「」の虜囚になっていた。

―――。

そして、悲しみに浸る間も無く俺の頭は解答を出していた。
携帯電話で1110と押し、テーブルの上に放り投げた。

そのまま、自分の部屋に戻りゲーム機に電源をつけ、ヘッドギアを被りベッドに倒れこんだ。

目の前が真っ暗になりいつもと違う注意書きが表示される。

「ラストライフ・オンラインに絶対にダイブインしないでください。
ダイブアウト出来なくなつております。また、現在、ダイブイン制限をかけようとしていますが、成功しておりません。ダイブインしない様にご注意ください。」

それを無視して「」を起動した。

薄れゆく意識の中で、隣の家までが騒がしい事に気づく。
俺が来ないから怒つていてるんだろうな。すぐには行けなさそうだ。

じめんと口に出してつぶやいたところで俺の現実での記憶は消失した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2332ba/>

ラストライフ・オンライン

2012年1月8日21時46分発行